

## 近世後期における片仮名「マ」の字形について

久保田 篤

## 一

片仮名は近世末期になっても一つの仮名に複数の字体が使用されるということが少なくなかったのに対し、片仮名の場合は、かなり早い段階で字体の統一が概ね行われていたという点がよく知られている。<sup>①</sup>江戸時代の片仮名は、既に初期でもほぼ現代と近い状態であったと見られ、字体に関して現在と異なる点は、「ネ」の一般的な字体が「子」であったことと、「キ」が「井」であったことくらいである。<sup>②</sup>

ただ、字形に関しては、例えば「シ」は下の点と第三画の右上に払う線とが繋がった形になったものがよく見られるなど、幾つか現在と異なる特徴が指摘できる。そのような字形の違いのうち、江戸時代によく見られ、現行の形との相違が最も目立つのは、「マ」の場合である。今回はこの片仮名「マ」の近世後期の実態を窺うことにする。

仮名に関する研究書として今なお最も優れたものと考えられる築島（一九八一）には、片仮名「マ」に関して次のような記述がある。

平安後期あたりから「ㄇ」「マ」の二種類に統一される傾向となり、中世まで同じような状態が続いた。江戸時代には「マ」のような形がよく用いられたが、「マ」の形になったのは明治以後である。

また、佐藤喜代治編『漢字百科大事典』（明治書院）は、やはり種々の点で極めて有用な事典であるが、片仮名に関しては、「Ⅲ 漢字の借音」に、「二 片仮名の字体と字源」（松下なるみ）があり、「Ⅰ 『假字考』（岡田真澄著）による片仮名の字体・字源一覧」で、『假字考』（文政五年（一八二二）刊）の片仮名に関する部分を抜粋し、「マ」の字体「マ」に注を付け「現行の「マ」の字体は明治以降に一般的となる」と記す。

これらの、「マ」の形になったのは明治以降「マ」の字体は明治以降に一般的に」などの記述を見ると、江戸時代の間は、片仮名「マ」の形は基本的には「マ」であって、現在のような「マ」の形は殆どなかったという印象を受ける。確かに、例えば、大田南畝『南畝莠言』（文化一四年（一八一七）刊）は、漢字平仮名交じりの文章の随筆で、振り仮名に片仮名が使用されているのであるが、そ

の最初の「巻下目録」のところを見ると、次のような例がある。

又松岡

この「又松岡(玄達葉を徂徠に贈る詩)」の「マタ」「マツ」、及び同じ頁にある「松殿」の「マツ」など、「マ」が全て「マ」になっている。

この同じ頁には、「鐘銘」「二年」とい

鐘銘 二年

う片仮名ネの字体「子」の使用、「異同」という片仮名ネの

異同

「井」「升平昇平」のような「シ」の下二つの画

井 升平 昇平

が繋がった形(これについては、今と同じ、二つが離れた形も、同頁に見られるが)など、最初に述べた近世の片仮名の特徴がよく見られ、これらと合わせてマには「マ」を使用するという当時の実態が窺われる。

しかし一方で、例えば、戯作類などの文章に時に交じる片仮名を見ると、「マ」の形はあまり無く、概ね「マ」の形が使われているという印象がある。「マ」の形が一般的になったのは本当に明治時代になってからなのか、疑問を感じるところもあるのである。そこで、近世後期における「マ」と「マ」の使用状況を窺うことにしたい。

今回は字体「マ」のなかに横線と点を繋げずに書く字形「マ」と

横線と点を繋げて書くことよってできた字形「マ」がある(このように「マ」の中に入れて字形を示す)という扱いにするが、この二つの違いは、字体の異なりと考えるべきであるかもしれない。字形「マ」には、更に、第一画の横線と第二画の点の最後まで、一続きに繋がった形で、第二画の点は繋げる線の終わりから始まるもの「マ」以下これを「マ」①と示すことにするが、これと、第一画の横線が右端で鋭角に折れて左下に向かい、その左下の端が第二画の点の中程と接するもの、すなわち現在の形と同じもの「マ」これを「マ」②とするが、大きく分けてこの二種類の形が見られる(両方を合わせたものは「マ」とだけ示す)。同一字形の低位分類として更に二種類の字形があるとしてよいのかとも思われ、その点からは「マ」と「マ」は「字体」が異なるとするべきなのかもしれないのであるが、仮名における「字体」をどう考えるかについては種々難しい点があり、その点の追究はここでは措くことにした。同一字形「マ」の字形の違いとする今回の扱いは便宜的なものである。検討の主な目的は、既にのべたように、「マ」が一般的になるのは明治時代になってからであるという指摘が、片仮名「マ」の歴史の記述として、果たして正しいものであるのか判断したいということである。ところで、江戸時代の前の室町時代においては、日本語の歴史の概説書、例えば出雲(一九七八)に、

「マ」「キ」の形はまだなく、「マ」「井」であった。

と記されているように、また先に引用した築島(一九八一)にも記されているように、片仮名「マ」の字形は「マ」(あるいは下の点

は短い横線とするべきかもしれないが）であって「マ」ではなかったと言える。続く近世初期も、基本はまだ「マ」であったと見られ、詳しく示すことは省くが、例えば鈴木正三『因果物語』片仮名本（寛文元年（一六六一）刊）においては、「マ」は全て「マ」である。契沖『和字正鑑抄』も「マ」であることが、前田（一九八一）で示されており、次のような指摘がなされている。

現代の「マ」とは異なる字形が基準字体となっている。

「マ」のように古体の字形が示される。

ただし、春日（一九四一）には、

マもこの形が開府百年前後に用ゐ出されて、維新に至った。

という記述があり、既に江戸時代前期のうちに「マ」の形も見られるようになっていたようではある。

江戸時代には仮名一覧のようなものが種々の書物に載せられるようにもなっていたから、それらを年代順に並べてみるというのも、規範の変化を探るといふ点では一つの方法として有効だと考えられる。しかしまず実際は実際に文章中に使用された字形を探ることにした。ただ、江戸時代の文献は膨大な量が残存しており、幅広く文字の調査を行うのは極めて困難である。取り敢えずは、多くの人々の目に触れたものと考えられる文学作品を中心に検討することにした。<sup>3</sup>手近に見られたものの幾らか調査したという程度でしかないのではあるが、近世後期の実態を概観してみる。

なお、「マ」の字源については、築島（一九八一）に、「末」の初画の変形であると述べられているのに従う。『漢字百科大事典』で

は、『假字考』が示している字源「末」について、注として「字源については、むしろ「万」に基づくとする説が一般的であるが、「末」と「万」の混合に基づくとする説もある」としている。現在確かに「万」が字源であると記すものもあるが疑問である。築島（一九九七）では、「世間一般に流布している解説の中には明な誤りがあり、又、未解決の問題が多く残っている」とし、「未解決、疑問の点を残すもの」の一つとして「マ」を挙げ、

「末」の初画と「万」の初画との混淆とされるが、このように

二元的な発生をした例は他になく、疑わしい。「末」の初画「二」の変形と見るべきか。

と記す。一応未解決の問題ではあるが、「末」とする説に従うべきであろう。

## 二

江戸時代になると漢字平仮名交じりの文章にも、時々片仮名が交じるようになっていたことは周知のとおりである。江戸時代の文章の中でも、比較的多くの読者を獲得していたと考えられる、戯作類に使用されている片仮名については、坂梨（一九八九）において詳細な考察がなされている。全般的な傾向として、感動詞や副詞、終助詞、捨て仮名、一部の長音部分などに使用されると言える。これらの部分は小書きの片仮名になることが多いのであるが、平仮名と同じくらいの大書きの片仮名が見られることもある。<sup>6</sup>また、漢字平仮名交じりの文章でも、振り仮名に片仮名が使用される場合も

ある。ただ残念なことに、「ア」、「イヤ」、「エ」、「コリヤ」「コレ」「ソレ」「モウ」「サ」「ヨ」などが多く見られるのに対し、片仮名「マ」が見られることはあまりなく、時に見られる場合のその殆どは「マア」という語の例であった。

近世後期の文学作品のうち、片仮名が多く、漢字が少し交じる程度の草双紙においては、赤本や、その後の黒本・青本では、片仮名が交じることはまず無いと言ってよさそうである。それが、この後の黄表紙になると、多くの作品に片仮名が使用される(作品によって、よく使われるものと、僅かな数しか使われないものがある)ようになる。そこで、黄表紙の最初のものとしてよく知られている『金々先生栄花夢』の出版された安永年間あたりの文献を見ていくことにする。なお、洒落本・滑稽本においては、これ以前の時期から片仮名の交じるものが見られるが、今回は安永期以降の資料を対象にした。

恋川春町『金々先生栄花夢』(安永四年(一七七五)刊)を見ると、「から言(唐言)」で合図する部分(七ウ)があり、その部分の字数はあまり多くはないが、ここは全てが片仮名書きになっている。その中でまず「マ」が見られるのは「イキマカニイケクコカクラ(いまに行くから)」の「マ」であるが、第一画と第二画が一続きに繋がった形の「マ」①になっている。しかしこれに続く部分「マコチケナコトイキツケテ(待ちなとって)」の「マ」は、「マ」の形である。更に「マアだんな(八オ)の「マ」は、印刷がかすれていて判断しにくいだが、「マ」かと見られる。

風鈴山人(大田南畝)『甲斐新話』(安永四年(一七七五)刊)には、「マア何んしろ」(四ウ)、「マアはじめなせへ」(六ウ)、「マアめしをくわつせへ」(九ウ)、「マアお取あげなんし」(一四ウ)、「マア呑なんし」(一五オ)、「マアく」(一八オ)、「マアちよつと」(三二オ)、「おめへはマアあつちへいきなんし」(三四オ)、「マアお休なんしよ」(三五オ)などの「マ」の例が見られるが、これら全て「マ」である。「マア呑ねへ」(一四ウ)だけは繋がった「マ」①のようにも見える。

恋川春町『其返報怪談』(安永五年(一七七六)刊)の「入道サマ」の「マ」も「マ」である。

山手馬鹿人(大田南畝)『道中粹語録』(安永八年(一七七九)・九年頃刊)に見られる、「マア夫なら」と「そんならマアお隣」の「マ」は「マ」であるが、これ以外の「マア后に」・「マア酒でも」・「マア爰へ」・「マアあのわしが」・「マアこつちイ」・「マアそんな」・「マアよく積つても」の「マ」は一続きの「マ」①である。

山東京伝『米饅頭始』(安永九年(一七八〇)刊)には、「そんな事はマアよしにしやうでんさまさ」(一ウ)があり、この「マ」は、一続きに繋がった「マ」①になっている。

唐来参和『大千世界牆の外』(天明四年(一七八四)刊)では、「マアよひの明星夜あけの明星をつつしまわう」(五ウ)の「マ」が、一続きの「マ」①になっている。

唐来参和『莫切自根金生木』(天明五年(一七八五)刊)には、「それだからマアちつとばかりでも」(八ウ)の「マア」あがるが、

この「マ」は「**マ**」である。

唐来参和『書集芥の川々』（天明五年（一七八五）刊）では、「兄きマアみりん酒でものんで」（三オ）の「マ」が、やはり一続きの「マ」①である。

唐来参和『和唐珍解』（天明五年（一七八五）刊）においては、本行の例として、「マア聞なんし」と「なんでもマアかたつてきかせなんし」があり、また振り仮名の例として、「**マ**」に「マア、」と付されたもの、「買」に「マイ」と付されたものがあり、これらに見られる片仮名「マ」の形は、一続きに繋がった「マ」①である。一方、本行の例の「ナセマア遊びなせへ」・「鳥渡マアいつてまいりませう」・「そつちへマア金をばしまつて」・「マア廊下へつれていくかい」・「アレをマアおしへてくんなんし」、振り仮名の例の、「**貌**」に「マウ」と付されたもの、「**満**」に「マアン」と付されたもの2例、もう一つの「**磨**」に付された「マア、」、「**賣**」に「マイ」と付されたもの、以上の片仮名「マ」は「マ」②である。このように、この作品においては既に現在と同じ字形のものが多く。

唐来参和『正札附息質』（天明七年（一七八七）刊）に見られた「マアまつてくたさりませ」（二一オ）の「マ」は、一続きに繋がった形の「マ」①である。

山東京伝『総籬』（天明七年（一七八七）刊）には、「マアちつとおよりなされまし」という例があり、このマは「マ」①である。

山東京伝『古契三娼』（天明七年（一七八七）刊）には、「マアみねへ」の例があり、この「マ」も、一続きに繋がった「マ」①であ

る。

森羅万象『御年玉』（天明七年（一七八七）刊）には、まず、漢字片仮名交じり文で書かれている「自序」の部分に、「寝コロソデ拜アアレマシヤウ」とあり、この片仮名「マ」も、本文中に見られる「大サツマ」（五オ）の「マ」も、ともに全て一続きに繋がった形の「マ」①になっている。

山東京伝『傾城買四十八手』（寛政二年（一七九〇）刊）では、「○しつぽりとした手」のところに「マアとをひのさ」・「マアうそにもうれしうざんす」・「傾城もマアむづかしいのサ」・「マアあすびなせへな」・「○見ぬかれた手」のところに「申すからマアちよつと」・「マア聞なんし」・「○真の手」のところに「したマアなりたけこつちで」・「そんならマアそふして」などの「マ」は、一続きに繋がった「マ」①である。一方、「マ」②の形の例も見られ、「○やすひ手」のところに「マア子どもをやつて見てくんなんし」、「○見ぬかれた手」のところに「マアこ、ここへ」・「マアおまちなんし」・「ぬしはマアなんだへ」・「マアしづかにしてくんなんし」・「おいひなんすからマアお出なんし」、「○真の手」のところに「マアくさやうなら」などの「マ」は、一続きではない現在と同じ「マ」②である。

山東京伝『繁千話』（寛政二年跋）の、「マアこふでござんす」・「マアねわけをねおき、なんしよ」（この例ではマとアの間にも繋がる線がある）・「アレサマアお待なんしよ」という片仮名「マ」の例が見られるが、これらの「マ」は、全て一続きに繋がった形の、

「マ」①である。

山東京伝『仕懸文庫』（寛政三年（一七九二）刊）に見られる、「マア団三」（一ウ）・「マアいつてきなせへ」（二オ）の「マ」は「マ」①、「マアこゝへ」（一四ウ）・「マアはたらいて」（一六ウ）・「モシマアそれじやア」（三二オ）の「マ」は「マ」②である。

山東京伝『絵兄弟』（寛政六年（一七九四）刊）には、振り仮名の例「未」<sup>イモ</sup>「松本」<sup>シロヤマ</sup>「島様」<sup>シマヤシ</sup>「憑」<sup>ヨリ</sup>「亦」<sup>マツ</sup>「應」<sup>オウ</sup>「真」<sup>マコト</sup>「揚卷」<sup>ユキマキ</sup>「親玉」<sup>オヤ</sup>「袴」<sup>ハカマ</sup>「盲人」<sup>メクラ</sup>「物前」<sup>モノサヘ</sup>が見られ、これらの「マ」は全て現在と同じ「マ」②である。

山東京伝『心学早染草』は、再刻用の稿本（寛政七年から八年頃）という興味深い資料の影印があるのでそれを見ると、「マツこんばんは」の「マツ」があり、これは「マ」①になっている。

式亭三馬『大悲の知恵話』（寛政九年（一七九七）刊）には、「マアこんなものさ」（四オ）に「マ」が見られる。「マアこつちをむきなんし」（八ウ）のほうは、一続きの「マ」①である。

梅暮里谷峨『傾城買二筋道』（寛政十年（一七九八）刊）の式亭三馬の序文にある「一寸マアお見なんし」の「マ」は現在と同じ「マ」②になっている。「○夏の床」にある「マアねやな」（寝）と「○冬の床」にある「マアあいそづかしをやめて」の「マ」は、一続きに繋がった「マ」①である。1例、「○冬の床」の「マアひとえさん」の「マ」は「マ」①になっているように見える。

式亭三馬『御覽親孝経』（享和二年（一八〇二）刊）の「マアしづかにしなよ」（三オ）の「マ」は「マ」②である。

式亭三馬『封鎖心鑰匙』（享和二年（一八〇二）刊）では、「マアなんまみだぶがなんまみだぶで」（七オ）・「マアがつてんならねへ」（七ウ）の「マ」2例が、現在と同じ「マ」②になっている。「マアいきほひが」（九ウ）の「マ」は、一続きの「マ」①である。

以上の安永・天明・寛政・享和期における、各の字形の見られた作品数と用例数を、元号別（元号の区分と片仮名の形は全く関係するものではないが、早い時期と後の時期との違いを見るために、便宜的に元号別にしてみる。なお、享和は短いので寛政と合わせる）に示す。ただし、種々のジャンルや使用箇所の違いを考慮せず、また資料によって用例数にかなり差のあることも無視して合計した数であり、あくまでも概観するために便宜的に示すものである。

安永期

- 「マ」① 4 作品14例
- 「マ」② 0 例

天明期

- 「マ」① 1 作品1例
- 「マ」② 7 作品11例

寛政・享和期

- 「マ」① 4 作品4例
- 「マ」② 7 作品17例
- 「マ」③ 5 作品25例



このように、安永・天明・寛政・享和期の作品に見られる片仮名「マ」の字形を検討すると、初めの安永期は（今回は安永期の片仮名「マ」の例はあまり多く見つけることができなかつたが）「マ」が目立つと言え、しかしこの時期にも既に繋がった「マ」①が使用されている、天明期では「マ」①の見られる作品が多い、一方現在と同じ「マ」②は主に寛政期以降見られるようになる、ただし天明・寛政・享和期でも「マ」①の使用されることがある、以上のような実態を、窺うことができる。

## 三

続いて、文化・文政期以降の例を見る。

式亭三馬『雷太郎強悪物語』（文化三年（一八〇六）刊）には、「マア〜はなして下さんせ」（五才）があり、この「マ」は、「マ」②である（第一画の終わりの部分と第二画のテントの間が少しだけ離れていて、第二画の点の上端と第一画の左端が接しているため「ヤ」にも見える形になっているが）。

式亭三馬『酩酊氣質』（文化三年（一八〇六）刊）においては、「○面白く無い上戸」の「マアねり賃百と見て」、「○啼上戸」の「是がマアおめへ」「ドレマアひとつ上やう」、「○異見上戸」の「三十か四十マア五十位の」、「○利屈上戸」の「マア〜ツ呑ませう」、「○腹立上戸」の「マア聞ておくんねんし」の、「マ」は、第一画と第二画が全て一続きに繋がった形の「マ」①で、下の字の「ア」とも繋がった形になっており、「○かつぎ上戸」の「おめへちやア」

の左側に小字で付された「オマヘタチハ」、「○くどい上戸」の「カカ、アどん。マまづなぜといつて」・「まづママまへの二十年」（この例の一つ目の「マ」は第一画の横線が鋭角で曲がった後に少しだけで消えているが、印刷の関係かと思われ、ほかと同じ「マ」②としておく）、「○ねち上戸」の「ギアマンの高脚杯」、以上の「マ」は現在と全く同じ形の「マ」②である。

式亭三馬『戯場粹言幕の外』（文化三年（一八〇六）刊）を見ると、巻之上の「マア中へ這入ッて」（アと繋がる）・「マア設りやす」・「コレ〜マアじつとして」（アと繋がる）・「マア来る内」（同）、巻之下に「ママ暮を明るな」（一番目のマは②に近い）・「マア押へよう」・「イカサマまづ」などが「マ」①、巻之下の「マア〜一つ呑な」は現在と同じ「マ」②になっている。巻之下の「ママママ真平〜」は、上のママが「マ」②で下のママは繋がった「マ」①になっている。

式亭三馬『浮世風呂』前編（文化六年（一八〇九）刊）では、巻之上の「マア叶屋の方から」・「テモマめつそいな事する人じやな」・「マあほらしい」、巻之下の「マア待つし」・「まだマア今やそこらの」など、「マ」は「マ」①になっている。

山東京伝『腹筋逢夢石』初編（文化七年（一八一〇）刊）に見られる、「こりやマアなんのにほひであらふな」（四才）、「ちつとマアおしくらをやめて」・「なんとマアけふは」（一八才）などの「マ」は一続きに繋がった「マ」①になっている。

式亭三馬『浮世夢助魂胆枕』（文化九年（一八一二）刊）では、

本文には「マ」の例が見られないものの、巻末の広告のところ、幾つか書名を掲げる下に説明を記しているのであるが、その説明は漢字片仮名交じり文になっており、そのうちの、「草書法要」の説明に、「漢魏六朝ヨリ唐宋元明マデ」という一節がある。このマは、「マ」である。既に種々の書を見たところから分かるように、この時期の戯作類では、基本的には「マ」は見られないと言えるが、ここは「マ」になっている。本文とは異なる巻末の広告であり、この書家の著作の内容を紹介する漢字片仮名交じり文であるということに関係しているとも見られる。

山東京伝『へまムシ入道昔話』（文化十年（一八二三）刊）では、横顔の形に見立てた「へまムシ」の「マ」が、「第一回」の前に記されている題名のほか、本文中でも、「第一回」に2例あり、これら全てが現在と同じ形の「マ」②である。また、同じ「へまムシ」であるが横顔の形に見立てた「へまムシ」ではない、人名の「へまムシ入道」も、本文中に4例見られるが、これらの「マ」も全てが現在と同じ形の「マ」②である。「全六冊大尾」の、絵の中にある、子供が書いた大きな文字「へまムシ」の「マ」も、同じく「マ」②である。これらの「へまムシ」以外の片仮名「マ」としては、他の作品と同様に「マア」が1例見られる。「第二回」にある「なんとマア此あんじつに」であるが、この「マ」も、現在と同じ形の「マ」②である。

曲亭馬琴『南総里見八犬伝』は、自筆稿本とともに複製がある第四輯（文政三年（一八二〇）刊）巻一のみ見ておく。板本には、

「捷親」（四ウ）の「捷」に振り仮名「マサレリ」が付されているが、この「マ」は、現在と同じ字形の「マ」②である。この部分の自筆稿本を見ると、同じ「マ」であるが、第二画と第二画が一続きに繋がった「マ」①になっている。稿本の「マ」①を、板本では「マ」②に変えている。この1例だけでは確かなことは言えないものの、この時期になると、出版物では「マ」②が正式な形であるというような意識があつたかとも見られる。

式亭三馬『茶番狂言早合点』（文政四年（一八二二）刊）では、「マ」の例「マアとつくりと工夫して・マア上下をおぬぎなせへ」が、現在と同じ「マ」②である。

曲亭馬琴『傾城水滸伝』初編（文政八年（一八二五）刊）にある「あのマアおつしやることは」（三三ウ）の「マ」も、現在と同じ「マ」②である。

為永春水『春色梅児誉美』初編（天保三年（一八三二）刊）と松亭金水『比翼連理花廻志満台』初編（天保七年（一八三六）刊）は、国立国語研究所の「国語研究変体仮名字形データベース」によって調査することができる。片仮名「マ」を検索すると、『春色梅児誉美』初編においては、「マ」①が18例、「マ」②が13例、『比翼連理花廻志満台』初編においては、「マ」①のみが32例、それぞれ見られることが分かる。

山東京山『大晦日曙草紙』五編（天保二年（一八四一）刊）の序文には、「薪」の振り仮名「マキ」があり、「マ」②である。

梅亭金鷲『七偏人』は初編・二編（安政四年（一八五七）刊）の



例のみ示すが、初編巻之上に「マウお口くちに触た」、巻之下に「マア彼か様いふ趣しゆ向ヨ」があり、また、二編巻之上に「マアく待て」・「マア待またツ」、巻之中に「マア聞なせへ」・「マツくお先へ」、巻之下に「マア悪らしい」があつて、全て現在と同じ形の「マ」②である。

文学作品ではないが幕末期の唄本も一つ見ると、『きやりくづし かまくら』初篇（安政二年（一八五五）序）には「ダアマヤガアマ」というのが見え、「マ」2例ともに「マ」②である。安政期にはもう現在と同じ「マ」②が普通だったようである。

以上を、広告の例は除き、用例の数をまとめておくと（人情本については右に数を示したため省く）、次のようになる。前節と同じくあくまでも目安といったものであり、この節では作品の一部しか調査していないものもあつてやはり便宜的な集計であるが、当時の概要は窺えると思う。

文化・文政期以降

「マ」 0例

「マ」① 4作品21例

「マ」② 10作品29例

文化・文政期以降は、文学作品においては、もう「マ」は殆ど見られず、専ら「マ」であつたと言つてよいかと思う。また、前節で見た時期よりも、現在と同じ「マ」②の比率の増える傾向があることも窺える。このように、近世後期のうちに「マ」が一般的になつていたと見られるのである。

#### 四

漢字片仮名交じり文の文章、学術的な著作、振り仮名に片仮名が使用される資料等も少し見ておくことにする。

戸田齋『文会録』（宝暦一〇年（一七六〇）刊）は、今回文学作品では対象にしなかつた宝暦期のものであるが、以下に見られるように、博物誌的な著作では「マ」が多いようであるのに対し、この書は時期が早いという点が関わるのか「マ」なので、加えることにした。「和名クマタケラン」（八オ）・「和名コガマ〇ヒメガマ」（八ウ）・「ハルタマ」（九オ）など、全て「マ」である。

本居宣長の漢字音関連の三つの著作、『字音仮名用格』（安永五年（一七七六）刊）・『漢字三音考』（天明五年（一七八五）刊）・『地名字音転用例』（寛政十一年（一七九九）刊）における、片仮名「マ」の字形は、全て「マ」である。このような、日本語学史上有名な著作の表記実態からは、近世後期もやはり「マ」の形ばかりが用いられていたと一見思うところである。片仮名使用の中心の一つは、漢字片仮名交じり文における使用であるから、江戸時代の「マ」は「マ」であるとされてきた理由が分からなくもない。

しかし、同じ漢字片仮名交じりである、大槻玄沢『蘭学階梯』（天明八年（一七八八）序）においては、「末枝ニ至ルマテ」（巻上一オ）・「日夜專精シテ已マス」（一ウ）・「天明三年癸卯マデハ」（二ウ）などをはじめ、片仮名「マ」は全て、現在と同じ形の「マ」②になっている。

木村兼葭堂『一角纂考』（寛政七年（一七九五）刊）は漢文体であるが、送り仮名等が小さい片仮名で書かれるという、よく見られる表記様式で、「今マ」などの「マ」が見られる。こちらは全て「マ」である。

小野蘭山『本草綱目啓蒙』（文化二年（一八〇三）刊）では、「アマミツ」（巻之一・一オ）・「ヤマメグリ」（二ウ）・「タマリミツ」（三オ）・「ニハカニタマル意ニテ」（同）・「草木ノ葉ニタマルツユ也」（三ウ）など、この書では「マ」はみな現在と同じ「マ」②である。

市岡猛彦『雅言仮字格』（文化四年（一八〇四）刊）は、見出し語は平仮名であるが、時に見られる説明は漢字片仮名交じりで書かれている。「○以部」の欄外に見られる注の「清濁ヲモワキマヘズシテ」に片仮名「マ」が見られるが、「マ」である。

同『雅言仮字格拾遺』（文化十一年（一八一四）刊）では、「○麻部」にある「師曰マチギミ又マウチギミナド訓ムハ後ニ」の「マ」が、「マ」の形になっている。

水谷豊文『物品識名』（文化六年（一八〇九）跋）では、「マヌカレザルコト」（目録三オ）・「マムシグサ」（五オ）・「イソマメハマナタマメ」（六オ）など、全て「マ」である。

皆川淇園『助字詳解』（文化一〇年（一八一三）刊）は漢字片仮名交じり文で、全ての「マ」が「マ」である。

平田篤胤『神字日文伝』（文政二年（一八一九）刊）は、漢字平仮名交じりの文章表記であるが、振り仮名には片仮名が用いられる

ことが多い。その「マ」は全て「マ」である（殆どは第一画が横線のみであるが、稀に第一画の最後に第二画へ繋がる線が、少しだけ認められるものはある。はしふみ2オの「巻」など）。

龍護『清流紀談』（天保四年（一八三三）刊）は漢字片仮名交じり文であるが、この文献では、「マ」は全て現在と同じ「マ」②になっている。

栗本丹洲『皇和魚譜』（天保九年（一八三八）刊）も、「ヤマメ」「ヤマブキ」「ナマツ」（巻一・目録）、「一種マルフナハ冬春多ク取ル」（三ウ）など、全て現在と同じ「マ」②である。

東条義門『男信』（天保十三年（一八四二）刊）においては、「マ」でも「マ」でもなく、字源の異なる字体、「万」を字源とする字体「マ」が使用されている。この時期の書としては珍しいと言える。

河崎清厚『雅言童諭』（天保十五年（一八四四）刊）では、最初に「平仮名をもて書たるは雅言片仮名をもて書たるは俗言なり下倣之」とあるように、雅言に対応する俗言が片仮名で記されているが、その「マ」は全て「マ」②の形になっている。

一方、鶴峯戊申『嘉永刪定神代文字考』（嘉永元年（一八四八）刊）では、幕末期のもののため最初のあたりには現在と同じ「マ」が幾つか見られる（序説6オ、本文1オなど）が、その後は「マ」の全てが「マ」である。

佐田介石『鎚地球説略』（文久二年（一八六二）刊）も、全ての「マ」が「マ」であり、その殆どが、第一画の横線と第二画の点が

離れずに接した形になっている。

以上のように、文学作品に比べると、学術的な著作では「マ」が多い。幕末に至っても専ら「マ」の文献がある点は、文学作品とは異なる特徴であると言える。しかし博物誌・本草書・蘭学関係の類においては、(宝暦期の書は「マ」であったが)既に天明期から「マ」が使用されている。また天保期以降は、学術的な著作であっても「マ」である場合が少なくない。漢字片仮名交じり文や学術的な著作については、今回は検討の中心としなかったため、更に調査を続ける必要があるが、このように少し見ただけでも、やはり、「マ」の一般化は、明治時代よりは早い時期であったということが言えそうである。

## 五

これまでに示したとおり、近世後期の「マ」の字形は、文学作品の本文に時に交じる片仮名においては、既に天明期頃から基本的にほぼ現在と同じ「マ」であり、古くからの「マ」はあまり見られない。文化・文政期以降は、基本的には「マ」であった。学術的な著作においては、幕末期に至るまでまだ「マ」が比較的多く見られるものの、「マ」になっている文献もあり、幕末期になると「マ」のものも少なくないという状態になっていたようである。以上の実態からは、江戸時代は、後期も、「マ」が一般的であったとは言い難い。特に、近世後期の後半は、既に「マ」が一般的であったと言つてよい状況だったことが分かった。「マ」の形が一般的になるのは

明治時代以降というわけではなかったと言える。

形から推測できることではあるが、今回の調査で、天明・寛政期の文学作品の用例の多くは「マ」①のほうであったこと、すなわち「マ」②よりも「マ」①のほうが先に定着していたということから、①の第一画と第二画を繋げて書くことによつて「マ」①が成立したと考えることができる。もちろん、この点を確認するためには更に以前の時期の「マ」の例を精査すべきであるが、調査結果と、書かれた形から、繋げて出来た形であると見るのが妥当であろう(こうであるならば字源は「末」でよいということになる)。

次の段階で、一続きに繋げた「マ」①では、斜めの点として存在するものであった第二画が、繋げて書くゆえ点には見えなくなってしまうため、斜めの点であることを明示するように字形を整え直したものが、現在の形と同じ「マ」②であると、推測することができる。また、この「マ」②には、くずした形ではない、楷書的な形を求めた結果、成立したという面もあると見られる。連綿の多い平仮名の中に交じる文学作品の「マ」には、幕末期に至るまで、一続きの「マ」①が多いのに対し、連綿の無い、片仮名交じり文や、動植物名の表記で、「マ」が見られた場合、「マ」①は全く無く、全て「マ」②であったことから、楷書的な形であったことが窺える。

更に言えば、漢字片仮名交じりの文章において遅くまで「マ」が見られ、文学作品では比較的早く「マ」になっていたという点について、早い段階では一続きに書く「マ」①が多かったことや、「マア」という語の場合に下の字の「ア」とも繋げた形になるものも見

られたことなどからも、平仮名の連綿が多い中に交じる片仮名と、一字一字が切り離された片仮名交じり文等の中の片仮名という違いが、影響していると考えられる。また、学術的な著作において「マ」が多かったことについては、字源をどの程度意識するかという点も関わっていると見られよう。『假字考』のように字源を「末」と示す書においては当然「マ」の字形になるはずである。春日（一九三四）には、「マはもと万字から出たマと末字から出たマ（この体も万からとされないこともないが、中など書いた例もあるから末字からとする方が妥当であろう）」とが両体及び行われて、近世まで来てゐる。今体はそれをマとしてその何れでもなくなつて了つた」という説明があるが、この「何れでもなくなつて了つた」とされるような形に「マ」はなつてしまつてゐるから、字源が意識されれば「マ」は避けられることになると思われる。





そのような「マ」が一般的になつて、古くからの（字源も分かりやすい）「マ」が廃れた理由は何なのかという問題がある。この点については、「マ」以外の片仮名における字形の変化も考慮しながら追求すべきであると思われるので、詳しくは改めて考察することにしたが、次のような点は指摘できるのではないかと考える。

近世の整版本の平仮名に関して、矢田（二〇〇八）において、「字型の均一」という変化があつたという、大変興味深い指摘がなされている。前期の仮名草子『二人比丘尼』・浮世草子『好色一代男』と、後期の滑稽本『茶番狂言早合点』・人情本『春色梅児誉美』とを比較すると、後期の資料では、「字型の大きさの差が縮まり」

「縦横の長さの差が大きい字体については、やはりその差が縮小している」とのことであり、「字型の横幅について、その凹凸が減少している」という点も指摘されている。

片仮名で同様のことを考えてみると、大雑把に言つて、当時の各字体の、横幅・縦幅は概ね同程度に調整できるような形に既になっている。古くは例えば「ウ」はウ冠の形に近く、縦幅の狭い形で書くしかなかつたわけだが、既に江戸時代よりも前の時代に、最後の払いが左下にのびるようになってゐる。そのようななかで、「マ」の「マ」は、第一画と第二画が接した形になっている場合も多く、平べったい形になつてしまふ。第一画と第二画がある程度離れた形になっているものもあるが、二つの画をあまり離してしまうと、一字であるとは見られなくなつてしまつたり、漢数字「一」と踊り字に見えてしまつたりする。このような欠点で、「マ」の形にはある。特に、一字一字の境界が曖昧な、例えば連綿を多用する表記の中では、その欠点の影響が大きいと考えられる。一方、一字一字がはっきりと区別できる表記や、本行の漢字から読みが推測しやすい振り仮名では、その欠点の影響は小さかつたということになる。

式亭三馬『俳諧歌麴』（文化一三年（一八一六）刊）の序文には、片仮名で付した振り仮名が見られるが、このなかには「マ」が幾つかあり、「マ」と「マ」の両方が見られる。それぞれを見ると、

①  ヨマキ  
②  マツタ  
 イマハ  
 マキ

のようになつていて、「マ」のほうは縦の長さが詰まつた平べった

い形になりやすく、一方「マ」のほうは、右の「全<sup>マキ</sup>く」のように縦の長さを短くすることも、「四<sup>ヨ</sup>卷」のように縦幅がある程度長くもできるという性質を、形が有しているということが分かる。平仮名に関して矢田(二〇〇八)が指摘する一字一字の大きさの均一化のような変化が生じていた近世後期においては、片仮名においても同様の変化が無意識に求められるようになり、「マ」ではなく「マ」のほうが選択されていたと考えることができよう。

更なる調査を行う必要があるが、片仮名「マ」は、文章表記の性格等により「マ」を用いる場面を含みつつ、既に近世後期において「マ」の形が一般的になっていった。その「マ」の一般化は、各の字が等しい空間を有するものと意識されるような時代へと向かう変化の一つである可能性があると言えそうである。<sup>(12)</sup>

## 注1

築島(一九九七)には、片仮名の歴史的研究の概要も示されているが、その要約の一つとして、「院政期十二世紀になると、現在の字体と余り変らない程になった。同一文献の中では一種の音節に対して、一種の字体が使われるのが普通となり、社会一般に、字体が統一される傾向が強くなった」という点が挙げられている。

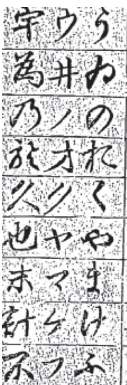
2 春日(一九四一)に、「異体と見るべきものは、子・井の二つであつて、これはむしろ江戸期の標準字体であつたのである。只マの字がまだ併用されてゐたやうである」とある。

## 3

今回調査を行った資料は次のものによつた。ここに示していないものは架蔵本を調査した。『因果物語』—古典文庫、『金々先生栄花夢』—傾城買四十八手、『南総里見八犬伝』—複製日本古典文学館(日本古典文学刊行会)、『甲新話』—国学院大学近世語研究会編『甲新話 本文及語彙総索引』、『其返報怪談』—国文学研究資料館日本古典籍デー

データベース(都立中央図書館加賀文庫蔵本および東京誌料蔵本)、『道中粹語録』—東京大学総合図書館所蔵、『米飯頭始』—莫切自根金生木『正札附息質』—総籙『古契三娘』—仕懸文庫、『文会録』—二角纂考『本草綱目啓蒙』—『劇場粹言幕の外』—『物品識名』—国立国会図書館デジタルコレクション、『絵兄弟』—新日本古典文学大系85、『大千世界牆の外』—『書集芥の川々』—鈴木俊幸編『シリーズ江戸戯作 唐来参和』、『御年玉』—『江戸の戯作総本(二) 全盛期黄表紙集』—(教養文庫)、『心学早染草』—鈴木雅子『山東京伝 心学早染草 本文と総索引』(港の人)、『大悲の知恵話』—御覽親孝経『封鎖心鑰匙』—『黄表紙式亭三馬集 復刻版』—(フジミ書房)、『雷太郎強悪物語』—鈴木重三・本田康雄編『雷太郎強悪物語』(近世民俗研究会)、『酩酊気質』—国文学研究資料館日本古典籍データベース(西尾市岩瀬文庫所蔵版本)、『浮世風呂』—新典社複製、『腹筋逢夢石』—傾城水滸伝』—江戸戯作文庫(林美一校訂、河出書房新社)、『へまムシ入道昔話』—新日本古典文学大系83、『茶番狂言早合点』—国文学研究資料館日本古典籍データベース(静岡県立図書館蔵本)、『地名字音転用例』—『助字詳解』—勉誠社文庫、『蘭学階梯』—国立国語研究所蔵日本語史研究資料。『きやりくづしかまくら』—『音曲大黒煎餅』(絵入はやり唄本甘種)〔太平書屋〕。丁付の無い本も多く、用例の所在を適宜省略することもある。

なお、今回は、往来物節用集類の調査は行わないのであるが、例えば幕末期の、弘化二年(一八四五)再版の『龍田詣』の末尾に示されている、いろは歌は、



となつていて「マ」は「マ」①と見られる形(あるいは②としてよい)か)であり、嘉永五年(一八五二)刊の『两点庭訓往来』の末尾に見



られる「片假名伊呂波」では、

ア  
イ  
ウ  
エ  
オ  
カ  
キ  
ク  
ケ  
コ  
サ  
シ  
ス  
セ  
ソ  
タ  
チ  
ツ  
テ  
ト

となっていて、こちらの「マ」は現在と同じ「マ」②である。このようなものを見て、「マ」が明治時代になってから一般的になったという点には疑問が生じる。

4 築島(一九九七)では、この箇所注が付けられ、注には「中田祝夫博士の直話による。」と記されている。

5 坂梨(二一九九)では、「語の読みを明確にするための補助的な用法としてのものでは語以前のレベルのものである」として接尾語・捨て仮名・送り仮名(活用語尾)など及び「取って」「知らざア」等の促音・長音・撥音を著わすものと、「単語であって、その中でより口頭語的な語を著わす場合」として感動詞・終助詞・間投助詞や擬音語・俗語などと、大きく二種に分けられ、近世の片假名使用の特徴が端的に指摘されている。

6 この点について、久保田(一九九九)(二〇〇二)などにおいて、小書きと大書きの二種類の性質を探ったが、今回の考察では、大書きの「マ」の例が少なかつたため、字形と字の大小とに関連があるかどうかは検討できていない。なお、用例を示す際、ここでは全て平仮名と同じ大きさで示した。

7 坂梨(二一九九)には、浄瑠璃本4作品の例も示され、「マア」の用例も見られることが分かる。この近世前期や、宝暦・明和期の洒落本等については、別の機会に改めて調査することにしたい。

8 「酌酔気質」の版種には複雑な点があり、土屋(一九八一)等に紹介がなされている。今回は三巻本を資料とした。  
9 本来は短い横棒だったものが、点に変わっていたのであるが、佐藤(二〇一三)に、「下の方が短いというのは、日本の文字においては普

通ではありません。「末」から生まれた「マ」も、始まりは下の方が短い横棒だったはずですが、点に変わっています(32頁)という興味深い指摘がある。

10 「字型」について、矢田(二〇〇八)では、「それぞれの単字の持つ大きさや縦横の比率を指す」としている。

11 矢田(一九九八)には、原稿用紙の普及により「文字を一字毎の枠の中に押し込めることによって、文字と文字の間に意識上の境界を生じさせた」点についての言及が見られる。また、佐藤(二〇一三)には、「現代は、原稿用紙に一字一字書かれます。この原稿用紙の「マス」の内側に、それぞれの字のエリアがあると考えていい」として、字のエリアの考察が行われている。平安・鎌倉時代の片假名のエリアについては、佐藤(一九九二)などの考察がある。

12 更に、佐藤(二〇一三)が、現代の片假名について、「極めて引き締まった字体の体系」と述べるようなものになった、「カタカナの字体の整備」ということについても考える必要がある。

#### 参考文献

- 出雲朝子(一九七八)「中世Ⅱ」(春日和男編『新編国語史概説』有精堂)  
 春日政治(一九三四)『片假名の研究』(明治書院『国語科学講座』春日政治(二)所収)  
 春日政治(一九四二)『仮名の沿革』(『国語文化講座第二巻』朝日新聞社、春日(一九八二)所収)  
 春日政治(一九八二)『仮名発達史の研究』春日政治著作集1(勉誠社)  
 久保田篤(一九九九)『黄表紙の片假名』(『国語と国文学』第七六巻第五号)  
 久保田篤(二〇〇二)『江戸時代後期の平仮名・片假名について』(国立国語研究所編『日本語の文字・表記—研究会報告論集—』)  
 坂梨隆三(一九八九)『江戸期戯作の片假名』(『日本語学』8巻2号、坂梨(二〇〇四)所収)



- 坂梨隆三(二〇〇四)『近世の語彙表記』(武蔵野書院)
- 佐藤栄作(一九九二)「字形から字体へ」『観智院本類聚名義抄』の「ツ」とそれに付された平声点をてがかりに」(『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院)
- 佐藤栄作(二〇一三)『見えない文字と見える文字』(三省堂)
- 築島裕(一九八二)『日本語の世界5 仮名』(中央公論社)
- 築島裕(一九九七)『片仮名の歴史的研究』(『日本学士院紀要』第五十一巻第三号)
- 土屋信一(一九八一)『「醜陋氣質」の初版本について』(勉誠社だより63言語編、土屋(二〇〇九)所収)
- 土屋信一(二〇〇九)『江戸・東京語研究―共通語への道』(勉誠出版)
- 前田富祺(一九九五)『和字正濫鈔の片仮名字体について』(『語文』第六二・六三輯)
- 矢田勉(一九九八)『印刷時代における国語書記史の原理』(『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院、矢田(二〇一二)所収)
- 矢田勉(二〇〇八)『近世整版印刷書体における平仮名字形の変化』(『神戸大学文学部紀要』35号、矢田(二〇一二)所収)
- 矢田勉(二〇一二)『国語文字・表記史の研究』(汲古書院)

(くぼた・あつし 本学教授)